

〔研究ノート〕

# 長野県上田市における家庭養護婦派遣事業の モデルに関する仮説検証

—— ホームヘルプ事業推進者、竹内吉正が言及した  
クリスチャン未亡人 K さんへのアプローチ ——

中 鳶 洋

Who Is Ms. K?: The Identity of a Christian Widow  
Who Was a Devoted Volunteer Home-Helper in Post-War Japan

Hiroshi Nakashima

## Abstract

In 1974 Yoshimasa Takeuchi wrote a paper about a woman he called Ms. K who lived in Ueda City. The present paper examines the role that Ms. K played as a pioneer home-helper in Ueda City, Nagano Prefecture, which is the birthplace of home-help services in Japan. The author visited Ueda City about 25 times to collect data and conduct interviews, and gathered and analyzed information about Ms. K. On August 16, 2007, the author was able to interview a woman named “Y” residing in Ueda City who, the author believes, was the subject of Takeuchi’s study. Furthermore, on August 15 and 17, 2007, the author met Takeuchi and confirmed the content of Takeuchi’s paper, along with details of the situation at the time of his writing. The author’s research led to conclusions that were quite different from what was found by previous studies. This paper points out contradictions between Takeuchi’s description of Ms. K and the new facts found by the author as follows:

- 1) Ms. K, who was regarded as a model home-helper, was the second daughter of Donpuu Kaneko, Ms. Y.
- 2) Because Ms. Y began volunteering as a home-helper in 1959, and the services had started in 1956 in Ueda City, we cannot call her the inaugurator of the system.
- 3) Ms. Y asserted that she was working as an insurance agent and was engaged in volunteer activities as a home-helper in the neighborhood during her free time around 1959.
- 4) Mr. Donpuu Kaneko was a district welfare commissioner, and received many awards for his *senryu*, a kind of haiku. He did not receive awards for his social work. Takeuchi asserts that Kaneko’s daughter, Ms. Y, referred to in Takeuchi’s paper as Ms. K., did receive awards for her social work, but she denies this.
- 5) Ms. K’s parents’ residence at that time was not in Kimachi, but in Fukuromachi.
- 6) Ms. K and Takeuchi were members of the same church (Ueda St. Michael and All Angels’ Church), and had met many times.
- 7) The descriptions in Takeuchi’s paper are based partially on hearsay and speculation.

*Key words:* Ueda City in Nagano Prefecture (長野県上田市), Fukuromachi (袋町), home-help service (家庭養護婦派遣事業 (ホームヘルプ事業)), Ms. K (K さん), Christian widow (クリスチャン未亡人), Yoshimasa TAKEUCHI (竹内吉正), Donpuu KANEKO (金子吞風)

## はじめに

1956（昭和 31）年に長野県下で創設された家庭養護婦派遣事業は、未亡人などの生活困窮者対策の必要性に迫られて生まれたものとされている（山田 2005: 179-198; 荏原 2008: 1-11 など）<sup>1)</sup>。すなわち、戦後の復興が完遂していない昭和 30 年代の県下では、民主主義・欧米文化の流入に伴い、男女平等などの進歩主義的な考え方が浸透し始め、それまでの軍人恩給などの特権や軍国主義的な思想は徐々に減退した。加えて、戦災の甚大さは計り知れず、こうした戦争被害者のみならず、多くの一般家庭でも世帯主の疾病・病気などの理由から生活基盤が破綻したケースがみられた。こうした生活困窮は、自殺、身売り、秩序混乱、社会不安などのさらに大きな問題へと発展しかねない状況につながるものとして軽視できないものであった<sup>2)</sup>。このようななか、昭和 30 年代前半、長野県庁主導により、生活困窮世帯の自立・向上を志向した具体的支援策として創設されたのが家庭養護婦派遣事業であった<sup>3)</sup>。しかしながら、家庭養護婦派遣事業の形成過程はそれほど単純ではない。その証左として表 1 に示した通り、このテーマの先行研究は少なくなく、諸説が存在している。例えばキーパーソンとしては、原崎秀司、古松国幹、クリスチャン未亡人 K さん、横内浄音などがあげられる。なかでも、上田市在住の K さんをモデルとする説が圧倒的に多い。にもかかわらず、それを裏づける実証的研究は遅々として進んでいない。この説は、竹内吉正（上田市社会福祉協議会初代事務局長）<sup>4)</sup> の論述を基としたものであり、多くの研究者に引用され、いまや戦後日本のホームヘルプ事業史の古典的記述のようになりつつある。それは、全国老人福祉事業会議を通し老人福祉文献賞を受賞した作品（「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望」『老人福祉』第 46 号、1974 年、58-79 頁）として注目を集めたからであるが、その竹内の主張はおおよそ以下のようなものである。

この事業が日本で初めて実施されたのは長野県上田市だといわれている。……(中略)……昭和 30 年秋、中央地区民生委員会（現在の単位民協）に出席したときのことである。古松国幹委員が次のような発言をした。「担当地区で中年の婦人 K さんは、母親の困っている家庭に出向き、こまごまと手伝ったり、孤独な老人の話し相手になったりして、もう 3 年来、かくれた奉仕活動をしている。その献身的な協力に地域住民から感謝の意を表したいという意見が盛り上がっている。……K さんは現在、未亡人で 3 人の子供（長女 会社員、長男 小 6、次男 小 1）を成長させ、貧しいながらも立派な家庭を築いている。」と。……(竹内 1974: 59)

つまり当時、K さんの活動が注目され始め、これを契機に同市内でホームヘルプ事業を創設しようという気運が高まったという文脈になっている。上村（1997: 247-257）、山田（2005: 179-198）、荏原（2008: 1-11）らの研究でも同様の論調で論じられ、竹内の記述を踏襲している。しかしながら、このように、上田市在住の K さんを取り上げた竹内論文は多用されるのに、その一方で、そこに登場した K さん本人が注目され詳述されてこなかったのはいったい何故なのか。わが国におけるホームヘルパーのモデルとされるほど、立派な実践を K さんがしていたならもっとクローズアップされ、その功績が称えられ、世に浸透していてもよいはずではなかろうか。そもそも、何故 K さんの本名が公表されず、イニシャル表記されるに留まっているのか。このような幾つかの問題意識から、改めて竹内論文の記述内容の真偽とその詳細を検証する必要があると考えられる。これらの諸点に関し、筆者は K さんモデル説の深化がみられないことへの疑問と、善行をしたとされる K さんの詳細が明かされないことの原因について、第一次資料に基づきながら実証的に探究することを優先課題と位置づけた。

それ故、本稿では、昭和 30 年代を中心にとり上げ、これまで詳細が公表されることがほとんどなかった、上田市在住の民間女性 K さんの特定と、彼女が家庭養護婦派遣事業にどのような形で関わっていたのかを、具体的に明らかにすることを目的とする。以下では、まず、①K さんを巡る先行研究の状況と問題点を指摘する。次いで、②筆者が同市で約 25 回行った聞き取り調査の結果と K さんの所在地を確認する。そして、③竹内吉正の証言及び論稿と、K さん本人の証言との比較検討を行うことで、通説とされていた竹内論文のなかの矛盾点を指摘する。④K さん本人を資料に基づき裏づけるべく、K さんの実父の詳細の解明と、その家族構成にアプローチする。そして、これらを基に、⑤旧来の K さんモデル説の誤謬とホームヘルプ事業の発祥に関する新説を提言する。なお、用語については、中嶋（2011: 28-39）を踏まえた。

## 1 研究方法と倫理的配慮

本研究の方法は、K さんに関する史資料の収集と、上田市内における聞き取り調査の 2 つである。まず、前者では、現地での調査が不可欠と考え、上田市社会福祉協議会、上田市立図書館郷土資料コーナー、県立長野図書館、上田聖ミカエル及諸天使教会、長野県立歴史館、浄土宗呈蓮寺（上田市）、長野大学図書館地元資料室などの公的機関に加え、私宅でも調査を実施した。一方、後者では、竹内の論述内容を手がかりにしつつ、宮之上孝司氏（現 上田市社会福祉協議会事務局長）、上村富江氏（元長野県介護福祉士会会長）、清水悦子氏（上田市社会福祉協議会初代会長 関澤欣三の義妹）、米津福祐氏（上田市民生委員協議会副会長 金子吞風の甥）のほか、多くの上田市民の方々にご協力をいただいた。さらに、竹内からも 2007（平成 19）年 8 月 15・17 日に証言を得た。なお、調査期間は、2006（平成 18）年 12 月 13 日～2012（平成 24）年 3 月 25 日までの約 6 年間である。

倫理的配慮としては、多くの事柄が 50 年以上前のことであり、歴史的事項となるため、研究倫理上問題ないということに加え、すでに公的機関等で公開済みであることなどに気を配ったが、他方、私宅でうかがった私的事項や保存文書の幾つかについては事前に許可を得る必要があると思われた。そこで、K さんと思われる上田市在住の民間女性 Y さんとその実子（長女）の S さんから 2009（平成 21）年 12 月 9 日に、実名を公表しないという条件の下、調査結果の引用許可を得た。

## 2 先行研究の状況と問題点

上述の通り、戦後日本のホームヘルプ事業の起源に関する先行研究は、幾つか存在し、そのほとんどが長野県上田市に着目したものである。表 1 のように、上田市在住の K さんのボランティア活動が起点になったという言説が一般化しつつあることは注目される。例えば、『『養護婦事業』の始まりは K さんというクリスチャンである『未亡人』の奉仕活動がきっかけであった。昭和 30 年秋、上田市中心地区民生委員会月例会で K さんという女性の近隣家庭への奉仕活動が紹介された。……」（山田 2005: 197）と山田は述べるが、実際に K さんが表彰されたという根拠が第一次資料を基に検討されていない。また、上田市社会福祉協議会（2006: 186）は、「……K さんの奉仕活動の動機は困る時はお互い様、まして隣近所のことであれば、なおさらとの博愛精神であった。K さんの活動が民生委員会で話題になり、それを機会に地域住民の連帯とボランティア活動が市民に波及し、『家庭養護婦派遣事業』のきっかけとなった。」とするが、K さんがどうしてそのような博愛精神をもち、献身的な活動を行ったのかの理由づけやその背景事情が十分明かされていない。加えて、そもそも K さ

んという一人物が特定されておらず、その詳細も未解明であることから、戦後日本のホームヘルプ事業の起源が不鮮明な状態に留まっている実情にあるといえる。現在や将来を見据えるべく、過去の思想や実践を捉え直す歴史研究の成果を希求するならば、この点の実態解明こそが急務と考えられる。この解き明かしはKさんを特定するということに留まらず、人物史研究を重視する社会福祉領域の歴史研究を一步前進させ得るものと思われる<sup>5)</sup>。

一方、長野県庁職員として欧米視察を行ったことがホームヘルプ事業化を促進させたという原崎秀司説も注目に値するものであるが、この点については筆者が『社会福祉学』第52巻第3号、2011年、28-39頁のなかで、その行程や成果を詳らかにしているので、参照いただきたい（本稿では、原崎説は視点が異なるため研究対象外とする<sup>6)</sup>）。

表1 戦後日本のホームヘルプ事業の発祥に関する文献整理

番号	出典	記事の主な内容	キーパーソン
1	保健福祉地区組織育成中央協議会『（活動記録）上田市の保健福祉活動』1959年、17頁（日本社会事業大学図書館蔵）。	（事例その1）木町のおばさんの働き 29年頃から旧市域の木町のおばさんKは、私欲なく、すこぶる寛大で同情心が深く誰に対してもよく面倒を見て町内で之を称賛しない者はいなかった。特におばさんは、要保護家庭を選び、病人の世話をし、孤独な老人の身の周りの世話をした。昭和33年市社会福祉大会において遂に社会福祉事業協助者として表彰されるに至った。そしていまもまだ無報酬の労を惜しまず奉仕活動をしている。当時地区民生委員ブロック大会でこの事例が出された時、民生委員を中心とした世帯更生運動の一環としてこの労力奉仕活動が注目され、30年度予算に法外援護金として、10,000円が組まれた。翌年県厚生課長の欧米視察によって得たHome help service（家庭養護婦派遣事業）が県市の委託事業として郡市社協に流されるや、上田市社協は、いち早くこれを基礎として事業計画をたて全市的事業に進展させ、現在では市内輸送機関の協力により、養護婦のための無料バスが交付されている。……	Kさん 原崎秀司
2	池川清「大阪市に家庭奉仕員が誕生するまで」『月刊福祉』第56巻第3号、全国社会福祉協議会、1973年、59頁。	日本ではホームヘルプを実施している自治体は、長野県社会課と京都市民生局である。……	
3	明山和夫・野川照夫「老人家庭奉仕員制度——その沿革と現状」『ジュリスト』第543号、有斐閣、1973年、101頁。	わが国で初めて家庭奉仕員制度が実施されたのは長野県下においてであった。昭和29年、当時の県厚生課長原崎秀司（故人）が欧米における社会福祉状況を視察の際、イギリスのホームヘルプサービスをみて、そこからヒントをえたといわれている（当時の随員であった人々の言による）。	原崎秀司
4	森幹郎著『ホームヘルパー』日本生命済生会、1974年、3頁。	わが国で初めてホームヘルプサービスを実施したのは長野県である。すなわち、昭和31年4月から始められた「家庭養護婦派遣事業」がこれである。これは、時の県社会部厚生課長原崎秀司氏が欧米視察の途次、イギリスのロンドンでホームヘルプサービスを見て、これになったものといわれている。なお、その運営については市町村が設置し、当該市町村社会福祉協議会に委託する方式がとられた。	原崎秀司
5	竹内吉正「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望」『老人福祉』第46号、1974年、58-79頁。	この事業が日本で初めて実施されたのは長野県上田市だといわれている。……（中略）……昭和30年秋、中央地区民生委員会（現在の単位民協）に出席したときのことである。古松国幹委員が次のような発言をした。「担当地区で中年の婦人Kさんは、母親の困っている家庭に出向き、こまごまと手伝ったり、孤独な老人の話し相手になったりして、もう3年来、かくれた奉仕活動をしている。その献身的な協力に地域住民から感謝の意を表したいという意見が盛り上がっている。……Kさんは現在、未亡人で3人の子供（長女 会社員、長男 小6、次男 小1）を成長させ、貧しいながらも立派な家庭を築いている。」と。……	古松国幹 Kさん 原崎秀司
6	上村富江「上田市ホームヘルプサービスを担った女性たち」『社会福祉のなかのジェンダー——福祉の現場のフェミニスト実践を求めて』ミネルヴァ書房、1997年、247-257頁。	……イギリスのホームヘルプ・サービスに啓発された原崎が上田市の事例を参照しつつ制度化した……	原崎秀司 Kさん



番号	出典	記事の主な内容	キーパーソン
7	介護福祉学研究会監修『介護福祉学』中央法規、2002年、35頁。	1956(昭和31)年、長野県で「家庭養護婦派遣事業」が発足した。ときの長野県社会部厚生課長であった原崎秀司のアイデアが出発点であったが、彼は先年欧米の福祉先進国を視察し、イギリスにおけるホームヘルプサービスについての実情をつぶさに見てきたのであった。 長野県で、ホームヘルプサービスが始まったのは上田市であった。そこには温かい心情をもつ熱心な一人の女性の存在があった。彼女は母子家庭の母親であったので、子どもを抱えて働く女性の苦悩をよく理解し、共感できたのである。かねてより子どもを抱えて働く女性のために役立ちたいと考えていたが、自分の子どもが成長して手がかからなくなった機会に、近隣の妊産婦や多子家庭の母親代わりを演じたり、孤独な高齢者の話し相手になったり、身体障害者の世話をしたりなどのボランティアな活動に従事していた。この女性のボランティアとしての活動は3年間続き……。	原崎秀司 Kさん
8	長野県社会福祉協議会『長野県社会福祉協議会50年のあゆみ』2003年、35頁。	現在の「ホームヘルパー派遣制度」の出発点となる活動が、日本で最初に始められたのは上田市であった。ボランティア活動として、病弱な母親の多子家庭やひとり暮らし老人の家庭の訪問手伝いをしていた活動が組織化され、昭和30年度において市社協が「活動促進費」として予算化し、事業協力したことがその始まりであった。	Kさん (内容から推測して)
9	井上千津子・尾台安子・高垣節子・上之園佳子『介護福祉総論』第一法規、2005年、101頁。	1956(昭和31)年4月から、長野県上田市、諏訪市など13市町村が各社会福祉協議会に委託して「家庭養護婦派遣事業」を開始した。このときの派遣事業は、日常生活を維持する家事サービスが主な内容であったとされている。	
10	山田知子「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する研究」『大正大学研究紀要 人間学部・文学部』第90輯、2005年、197-198頁。	わが国のホームヘルプ事業は昭和31年長野県「家庭養護婦派遣事業」を嚆矢とする(198頁)。「養護婦事業」の始まりはKさんというクリスチャンである「未亡人」の奉仕活動がきっかけであった。昭和30年秋、上田市中央地区民生委員会月例会でKさんという女性の近隣家庭への奉仕活動が紹介された(197頁)。	Kさん
11	上田市社会福祉協議会『住民と共に歩んだ50年』2006年、186頁。	昭和27・28年頃、上田市に住む未亡人のKさんは、近所の妊産婦家庭や多子家庭で、病弱などで倒れた母親の代わりとして子どもの面倒をみたり、出産の手伝いなどをした。また、孤独な老人の話し相手や、身体の不自由な人達の身のまわりの世話などもこまごまとし、献身的な手助けを3年行っていた。 Kさんの奉仕活動の動機は困る時はお互い様、まして隣近所のことであれば、なおさらとの博愛精神であった。Kさんの活動が民生委員会で話題になり、それを機会に地域住民の連帯とボランティア活動が市民に波及し、「家庭養護婦派遣事業」のきっかけとなった。	Kさん
12	中嶋洋「長野県上田市における家庭養護婦派遣事業(1956年)の歴史的意義」『日本ボランティア学会誌 2006年度版』2007年、172-187頁。	家庭養護婦の派遣が事業化される以前に、上田市在住の一人のクリスチャン未亡人の献身的な奉仕活動があったことが指摘されている。……上村氏「なんだかんだ言って、このKさん。熱心なクリスチャンでね。……この人がそれこそ混じりっこもない純粋に、自分も母子家庭だったんですね。この方。子ども3人、まだ小学生でしたね。自分もそういう状況の中に生きているんだけど、見渡してみればもっと気の毒な人もいるじゃないか、というところで、純粋に助け合いの精神。……」(181頁)	Kさん
13	荏原順子「ホームヘルプサービス事業揺籃期の研究——長野県上田市における『家庭訪問ボランティア支援事業』の背景」『純心福祉文化研究』第6号、2008年、1-11頁。	……県社協では「新生活補助運動」を推進し始め、同市下でも上記会長・副会長の提案に実務を持って応えようとする竹内の試行錯誤がみられた。(4頁)……本当の意味でのニーズをつかむには、住民の日常生活での関係づくりを大切に、時間をかけて把握すること(7頁)……	Kさん 横内浄音 竹内吉正

【注】但し、上村への聞き取り調査結果を引用した中嶋(2007: 172-187)においても、上村の証言内容の検証といった作業が十分に行われておらず、Kさん本人を特定できていないことから、ここに課題が残されていた。

【出典】中嶋 洋「戦後日本のホームヘルプ事業の起源——発祥地、長野県上田市木町の1950年代の状況を探る」『帝京平成大学紀要』第19巻、2008年、57頁を加筆修正。

### 3 研究結果Ⅰ——長野県上田市における聞き取り調査(25回)の結果から

#### (1) Kさんの居住地の検証

上述した問題意識の下、筆者は上田市内在住の民間女性Kさんを探し求め、2007(平成19)年8

月頃から同市内での聞き取り調査を開始した。その際、筆者が配ったチラシが図1である。2012（平成24）年3月現在では、同市への訪問回数が25回を超えたが、当初はまずKさんの居住地の特定から着手した。竹内（1974: 58-79）や山田（2005: 197）はKさんの居住地について「中央地区」とし、保健福祉地区組織育成中央協議会（1959: 17）や上村（1997: 247-257）は「木町」と記していたことから、筆者は『上田市住宅地図 昭和37年度』（1962年）を繙き、その該当地域を調べた。さらに、木町の地域住民への聞き取り調査も併行し、以下の図2のような昭和30年代の木町周辺地図を入手・作成した。また、2006（平成18）年12月13日に筆者の聞き取り調査に答えた上村富江氏（元長野県介護福祉士会会長）によれば、「（Kさんは）1952年頃から3年間位、上田市木町で（家庭訪問ボランティア活動を）やっていたんですよ。で、この方、実は赤線地帯にいらっしたんですよ。……」と証言され

# 介護福祉士・ホームヘルパーの起源をさぐる —長野県上田市木町在住のクリスチャン未亡人Kさんの 家庭訪問ボランティア活動から—

## Kさんを探しています

（1956〔昭和31〕年、家庭養護婦派遣事業以前のお話）

⇒○上田市木町に在住していた（50年くらい前）

○ 昭和27・28年頃から3年間、上田市木町でボランティアをされた（母子家庭、多子家庭、妊産婦、独居老人宅などでごまごまと世話をした）。

○ ご存命であれば、現在90歳くらい（おそらく死亡）

○ クリスチャン未亡人Kさん：

⇒おそらく「小島さん」か「小山さん」か「小林さん」か……

○ 母子家庭、子ども3人（女、男、男）

○ その後（S30年代中旬）、広島市に移住（⇒広島赤十字・原爆病院で「病院ボランティア」をなされた。）

（連絡先）中島 洋（090- - ）：帝京平成大学  
〒166-000 東京都

図1 筆者が配った「Kさんを探しています」案内チラシ

【出典】筆者作成による。

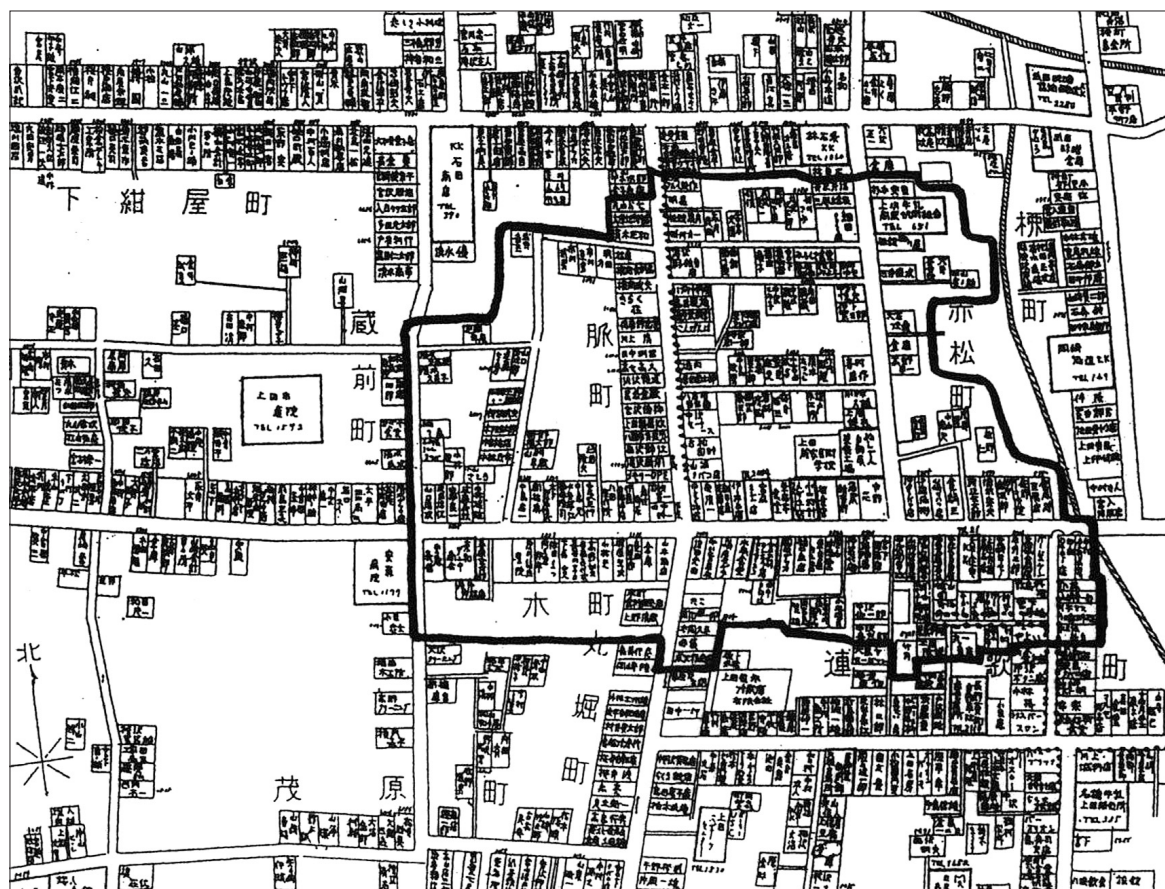


図2 昭和30年代の上田市木町の地図

【出典】『上田市住宅地図 昭和37年度』1962年，4頁（上田市立図書館蔵）。一部筆者が加筆。

ていたことから、筆者は図2の太枠内を念入りに調査し、実際に木町及びその周辺地域を訪ね歩いた。その結果、そこでは間接的事柄や関連情報は得られたりするのだが、調べれば調べるほど、その先に更なる可能性が複数出現するため、結局は振り出しに戻るといふことの繰り返しであった。調査回数が5回、6回と増える一方、この時点では一向にKさん本人につながる決定的証言は得られなかった。このように、Kさん探しの調査は2007（平成19）年8月上旬までは、遅々として進まない状況にあった。

## （2） Kさんの氏名特定の試み——上田市民及び竹内の証言を基に

ここで、Kさんの居住地とされていた上田市木町での聞き取り調査から得られた主な証言を改めてまとめる。「もし赤線地帯に（Kさんが）いらしたなら、そういう商売の方は強かだし、ボランティア活動なんかはしなかったと思いますよ。」（上田市木町住民、2007年8月2日）、「（Kさんを表彰するように推薦したとされる）古松国幹さんは教員をしていたけれど、どちらかというと閉鎖的で、民生委員はしていなかったのではないかな。元々、士族の出身。士族同士のつきあいはあったようだが、それも3〜4人程度。一般人との付き合いはなかった。……」（上田市木町住民、2007年8月3日）など、おおよそ先行研究の記述内容とは異なる回答が多かった。延べ20人以上の地域住民から得られた証言を総括しても、ここではKさんという人物像に辿り着くことはできなかった。ちょうどこの頃、「本当にKさんは上田市木町に住んでいたのか」、「Kさんというクリスチャン未亡人は実在人物なのか」などの疑問が筆者の内面に沸々と湧いてきた。

こうした経緯から、2007（平成19）年8月頃、一旦、筆者は万策尽きた感がした。反面、再度冷静に考え直してみると、まだ行っていない方法が残されていることに気づいた。それは、このKさんを最初に論稿のなかでとり上げた執筆者である竹内吉正氏本人への聞き取り調査を実施していないことであった。宮之上孝司氏（現 上田市社会福祉協議会事務局長）によれば、「（2007年8月頃の）吉正さんは、多少認知症状が出てきているから無理かもしれない」ということではあった。しかし、たとえ現在の年齢が80代後半である竹内氏であっても、彼の全盛期であったと思われる1950年代の事柄についての彼の長期記憶はしっかりしているはずと筆者は考え、少なくとも残された可能性として検証しておく必要性を実感した。そこで、2007（平成19）年8月15日、筆者はうへだはら敬老園に入園中の竹内氏を訪ねた。最初、初対面の筆者に対し、一瞬困惑の表情をみせた竹内氏であったが、事情をいねいに説明したところ、快く面会に応じてくれた。そして、その後、竹内氏の口から予想外の回答を得るまでさほど時間を要しなかった<sup>7)</sup>。以下、臨場感を出すために、その時のやり取りをそのまま記述する。

中 嶋 ……上田市のホームヘルプ制度のきっかけになりました、クリスチャン未亡人のKさんですね。このKさんという方は、吉正さんが知る限り、どういう方だったんでしょうか。

竹内氏 教会に、婦人会でリーダーシップをもっていた方です。……この方はね。何というかな。あまり始めは（Kさんについて）分からなかったですね。うん。それで、仕事を非常に熱心にされてね。誠実なんですよ、誠実。一生懸命やってくださった。評判もよかった。うん。そういう方です。そんな目立つ方ではなかった。……それだけ誠実な人だった。信仰をもっていたからね。うん。私はそう、見習わないといけないところがいっぱいある。……



中 鳥 お会いしたことはありますか？

竹内氏 うん。何度も会っている。教会仲間で、聖公会（上田聖ミカエル及諸天使教会）。

中 鳥 もし、よろしければ、この方のお名前ですね。何という苗字か教えていただけますか。

竹内氏 あかね。金子。名前までは知らないけれど。苗字は金子。金の子どもの子です。それでね、金子さんはお嫁に行かれてね。この人のお父さんは民生委員でね。長い間、民生委員をやってらっしゃってね。優秀な民生委員だったですよ。

中 鳥 その方のお名前は何かといいますか？

竹内氏 金子吞風（本名 金子喜一郎）。お鮎屋さんをやっていた。金子って、優秀な民生委員ですよ。うん。器量のある人でね。木町というのはねえ。遊び場でね。花柳界、いわゆる赤線があったところですね。金子さんのおうちは、昔から鮎屋。鮎屋でとてもおいしいんだよ（笑）。そこで、一杯飲むと、「うちの鮎屋に寄れよ」とよく話題になるくらい。古いうちですよ。「武蔵野」というおうちで、鮎屋をやっていた。よく皆で一杯やると「武蔵野に寄ろうや」といって行ったもんですよ。……（2007年8月15日、筆者による竹内吉正氏への聞き取り調査の結果より）

様々な事情があったと推察されるが、論文のなかでKさんとイニシャル表記し、すべてを語ろうとしなかった竹内氏が筆者の聞き取り調査に対し、本名を明かしたことに加え、Kさんの実父にまで言及したことに、少なからず筆者は驚きを隠せなかった。ここで、Kさんを特定する要点をまとめると、「Kさんは聖公会（上田聖ミカエル及諸天使教会）の会員であること」、「Kさんの名字（旧姓）は金子であること」、「Kさんは熱心なクリスチャンで誠実な人柄であること」、「Kさんの実父は金子吞風といい、『武蔵野』という鮎屋の店主であること」、「Kさんの実父の金子吞風は優秀な民生委員であったこと」、「Kさんと竹内氏は教会仲間であること」などがあげられる。これらはKさんの特定につながる決定的要因と考えられた。88歳（聞き取り調査時）という高齢の竹内氏の証言であることに十分に注意を払う必要があるが、筆者とのやりとりも軽快そのものであり、しっかりとした口調で懸命に竹内氏は語ってくれた。加えて、調査途中に、お一人で用便に行くなど、心身ともにしっかりされていると見受けられた。その反面、確かに、記憶の前後関係において曖昧な時があるのか、何度か聞き直されたりしたが、一つひとつの質問に対し確認しつつ、竹内氏は自信をもって堂々と語ってくれた。このことから、その信憑性は高いと考える。この竹内氏の直接的証言を手がかりに、筆者はさらに同市内で調査を進めた。まず、当時の上田市社会福祉協議会副会長（初代）で、浄土宗呈蓮寺の住職でもあった横内浄音の子孫を訪ね何らかの手がかりを得ようと考えた<sup>8)</sup>。そこで、現住職で横内の孫にあたる横内浄真氏からうかがった証言をまとめると以下のようなになる。

武蔵野？木町の武蔵野というお店は知らないです。昔は街のなかに幾つかお鮎屋はありましたけれど、昭和27・28年くらいでしょう？分からないですね。金子さんで、武蔵野というお鮎屋は袋町にあったんですよ。袋町のほうで武蔵野さんって、今はやっていないですけど、木町ではないですね。でも、今は代が代わってしまっているから。場所は分かりますけれどね。先代（横内常雄氏）が生きていれば、もっと詳しいお話を聞けたと思うんですけど。……（Kさんは）教会の方だから。教会のほうがよく知っているんじゃないかなあ。でも、牧師さんもとときどき代わられるからね。……ここが馬場町というんですよ。ここが飲み屋街なんですよ。ここですね。武蔵野って。香青軒という結婚式場の西隣ですね。昔はお鮎屋だったけれど、今は何やっているか分からない。（2007年8月16日、筆者による横内浄真氏への聞き取り調査の結果より）



さらに、この点を説明すべく、『上田市住宅地図 昭和 37 年度』（1962 年，3 頁）を繙き，当時の上田市内の鮎屋の営業状態を調べた。主なものを抽出すると次のようになる。「新稲葉寿し（上田市東町），むさしのすし〔武蔵野〕（同市袋町），仲寿し（同），糸平すし（同），一力寿し（同市相生町），さかき寿し（同市松尾町），扇市寿し（同），三楽寿し（同）」（図 3 参照）。すなわち，竹内氏が言及した鮎屋（武蔵野）は，木町ではなく袋町にあったことが分かる。ここから，1974 年時に執筆された竹内氏の論稿のなかに部分的に誤りがあることが明らかになった。筆者は上記横内氏の証言から，調査場所を木町から袋町に切り換え，さらに袋町での聞き取り調査を敢行した。同町で得られた幾つかの証言は以下の通りであり，とりわけ，結婚式場「ささや」で得られた証言が決め手になると思われた。

え〜と，武蔵野のおやじさんが一昨年，亡くなっていますから。私とちょうど同じくらいの年齢の方がいま（貸しビル「武蔵野」3 階の住居に）住んでいて，その人からそういう話を聞いてもらえればいいんですけどね。（K さんの広島移住説に対して<sup>9)</sup>）……広島のように？ だったらそれはとんでもなく昔のことだね。私の知らない分野だ。前の前（の代）くらいか。……多分，今の亡くなった方の前の方の，金子さんよりね。同じ親戚の「ささや」さんって，結婚式場があるんですよ。そこの方のほうが詳しいです。ささやさん。その人のほうが親戚だから。それで，叔父にあたりますから。……（2007 年 8 月 16 日，筆者による袋町住民への聞き取り調査の結果より）



図 3 昭和 30 年代の上田市内の鮎屋

【注】本図からも，金子が経営していた鮎屋「武蔵野」（図中では「むさしのすし」）が木町ではなく，袋町にあったことが分かる。

【出典】『上田市住宅地図 昭和 37 年度』1962 年，3 頁（上田市立図書館蔵）。一部筆者が加筆。

次いで、筆者は結婚式場「ささや」で聞き取り調査を行った。「私の研究テーマは、ホームヘルプ事業の発祥を調べるということで、歴史研究をしておりまして。で、上田市の袋町に住んでいらした武蔵野というお鮎屋を経営されてた金子さんの娘さんが、近隣の母子家庭、多子家庭等、母親が困っているご家庭に出向いて、奉仕活動をなされていたと。その活動が実は今のヘルパー制度のルーツになっている可能性があるというのが、少しずつ分かってきまして。それで、当時のお鮎屋の『武蔵野』の店主の金子さん、あるいは娘さんについて、詳しい情報をお持ちの方を探しているんです。……」(2007年8月16日、筆者による米津氏への聞き取り調査の結果より)という筆者の問いかけから、以下のような証言を得た。そして、この一連の聞き取り調査から、筆者は漸くクリスチャン未亡人Kさんに該当すると思われる一人の女性Yさんに辿り着くことができた<sup>10)</sup>。特定するための資料や史的根拠の探究という作業は残されているものの、この結末は、先行研究において約55年間空白であったKさんモデル説に一石を投じ得るものであるばかりか、当事者である竹内氏の記憶・経験を捉え直し、一部修正することにもつながり、この点において大きな前進であったといえる。

……はは、なるほど。ということは、私のうちの本家のほうですね。袋町の「武蔵野」というのは。……親父(米津福祐氏)<sup>11)</sup>に聞いたほうが良さそうだなあ。その本家のことになると、私よりも親父のほうが詳しいわけだから。本家のね。今、Z町にいるはずですよ。本家の先代は鮎屋自体はもうやめていますね。何年前だろう、当主が亡くなられたのは、3年前くらいかな？……年代的に該当するのはこの人(Yさん)です。クリスチャンです。この方にお目にかかれれば一番いいんだけどな。Yさんですね。広島のこと私はよく分からないけれど。私は昭和35年生まれなんです。だから、私が生まれる前の話だから。親父が知っているかなあ。……(2007年8月16日、筆者による米津氏への聞き取り調査の結果より。Kさんの実名については公表の許可が得られないのでイニシャル表記とした。)

## 4 研究結果Ⅱ——竹内吉正の論説における矛盾点

### (1) Kさん及び娘さんの証言

上記経過を経て、米津氏の証言をもとに筆者は2007(平成19)年8月16日、Yさん宅を訪ねた。そして、上田市在住のKさん及び娘さんに初対面した筆者はさらなる確証を得ようと努めた(正確には、Yさん及びSさんとなるのだが、便宜上、以下もKさん及び娘さんと記す)。玄関口に、娘さんの後から「どちらのお方？」と言って出てこられたKさんを見た瞬間、「ああ、この方がKさんだ」と認められるほどKさんは凜としておられた。お二人と玄関口で少し話した後、筆者はその日、自宅居間にあげていただき、詳細をうかがうことができた。そこでの主な会話の要旨は以下の通りであった。竹内のこと、ホームヘルプのこと、教会のこと、実父 金子吞風のことなど多岐にわたる話をうかがいながら、Kさんの熱心で誠実な人柄を感じ得た。少々長くなるが、以下、Kさんの証言をそのまま抜粋し記述する<sup>12)</sup>。

……聖公会で。この竹内さんも同じ教会なんです。……(民生委員会から表彰されたかという筆者の問いに対し) ないですけどね。私、聖公会の信者なんですけれど、クリスチャンなんですけれど。え〜と、ただね、竹内さんはそういうボランティア活動をする仲間を集めて訪問奉仕をしましたからね。そういうお手伝いはしましたよ。それほど大きなことじゃないですけどね。うちの父がお鮎屋をやっていたもんですから。それ

（ホームヘルプ事業）は竹内さんがやり出したことだよ。上田市でそういうシステムをつくったわけだよ。私のほうにもボランティア活動の仲間が集まるグループがあって、はっきりはないけれど、時間があるときにね……。未亡人会（上田市さつき会）に私も入っていましたもんね。あの～、そういうようなもの（ホームヘルプ事業）をつくるときもね。この人（竹内氏）は一生懸命やっていましたからね。……

東京から母子家庭になってから来て、うちの父が民生委員をされていて、その人（竹内氏）と懇意にしていましたからね。で、私もこの方（竹内氏）にいろいろお世話になって。私たちはその頃、なんていうの、ホームヘルパー。はっきりはしていなかったけれど、そういう（奉仕活動をする）会をつくっていたわね。吉正さんは市役所にもいてね。そういうようなことで、小さな交流はあったんですよ。で、私は偶然に同じ教会でしたからね。で、あの～、お手伝いして、竹内さんがボランティアの人を集めるとかいうことをしていたから、一緒になって話を聞いたとかね。そういうようなことはあるわよ。いわゆる、その～、ホームヘルプ（事業）をつくるために、あれしたんじゃないかねえ。

（ホームヘルパーをやっていたのかという筆者の問いに対し）それは、ちょっと、私できなかったわね。あの～、そういうシステムに入ることはできなかった。私、他のセールス（明治生命の外交員）をしていましたから。それで、ホームヘルパーをするということは、人のうちに完全に入らないといけない。私、子ども3人いて、主人いなかったんです。亡くなったんです。そんなことをする暇がなかったですね。で、他の仕事というのは、自由な時間があるというか。会社に朝行って、話を聞いて、自分の予定を出して、自由に行動して契約さえ持っていきゃ、あの～、月給ももらえましたし。だから、あの～、あれですよ。ボランティアですることだってね。歩いているとそういう（手助けが必要な）うちは分かりますよね。お手伝いをしなくちゃいけないと。① で、私はこの人（竹内氏）の仕事を手伝うんじゃなくて、自分は保険の仕事でもって、子ども3人を育てたんですよ。……教会は奉仕をするでしょう。仕事としてはしないけれど、奉仕はしますからね。私もホームヘルパーやったわけじゃないんだけど、お手伝いはしましたけれどね。ホームヘルパーになって、というわけじゃない。私のほうはボランティアで一時期、やりましたけれど。ホームヘルパーをつくった人はこの人（竹内氏）なんですよ。そのときにお手伝いをしましたよ。……

うちの父が民生委員をやっている頃、（竹内氏は）一生懸命、市役所に勤めていて、民生委員のあれをやっていたから。それで、場所が花柳界のなか（上田市袋町）にうちがあったもんですからね。非常に用事があるんだよね。だから、うちの父はこの人（竹内氏）のためにじゃないけどね。うちの父のところによく来ていたらしいですよ。で、この人は、そういう困っている人たちのことなんかの話を聞いて、それで、ホームヘルパーの制度をつくったわけなんですよ。……

教会ではね。そういう訪問奉仕とかはしましたよ。教会の婦人会で、病院とか、一人でいる人のおうちに行ったりしたよ。そういう活動はしていました。だけど、そんなしょっちゅうやっているわけじゃないですよ。（礼拝のため）日曜日に出たときに、訪問するということはしていた。この人（竹内氏）は、そういうことをもっと広げようとして、ホームヘルパーというものをつくったんですよ。② ヘルパーの手続きの勉強をしたり、お話をしたり、区役所でね。福祉課で会合があれば行き会うぐらいでね。うちの父が民生委員をやっていたから、竹内さんをよく知っていたんです。ヘルパーの仕事をしたというのはないですけど、協力はしましたけれど。……（2007年8月16日、筆者によるKさんへの聞き取り調査の結果より。下線筆者）

一方、Kさんとともに筆者の聞き取り調査に対し、一つひとつの事項を確認しながらていねいに回答してくれた娘さん（長女）の証言は次の通りであった。



(上田市に家族4人で帰郷したのは)昭和34年4月から。昭和33年に父(Kさんの夫)が亡くなったんで。でも、おじいちゃん(金子吞風)が民生委員で、いろいろおうちを訪問したりとかってすることはいいけれど、その娘だからといって、民生委員でもないのに、そういうところに行って、顔を出してってというのは、そういうのはちょっといけないんですよね。……(Kさんは)確かに世話好きというか。見捨てておけないという性格ではあります。だから、さしでがましいかも分からないけれど、そういうのを見たときには活動をしていたかもしれないですね。まあ、そういうことがあったんですかね。私は子どもだったしあまりはっきりとは分からないんですけれどね。母(Kさん)は保険の外交員(明治生命)をやっていて、時間的に自由があるということで、私たち3人を育てながら、その仕事をしていました。ですから、まあ、時間的にはそのボランティアとか、困っているお宅にお手伝いに行ったり、話を聞きに行くとかという話を、たまに聞いたことはなきにしもあらず③のような気もしないでもないんですが……。東京から引き上げてきたときは、おじいちゃんの蔵を借りて、そこから、ここ(Kさんの現住地)にきました。ここにきたのは、昭和35年。だから、昭和34年の1年間は、このうちの近くを借りて住んでいました。……(Kさんは)性格的には、人を放っておけないというところもあると思いますし。おじいちゃんが民生委員だったので、話を聞いているということがあったかもしれないし。……(2007年8月16日、筆者によるKさんの娘さんへの聞き取り調査の結果より。下線筆者)

上記下線①及び③を総合すると、従来の先行研究では明確に指摘されてこなかった視点、すなわち、未亡人で子ども3人を抱えていたKさんが、何故近隣でボランティア活動をなし得たのかの理由が明らかになろう。つまり、当時としては珍しい保険外交員として働くKさんが、仕事合間の自由な空き時間の範囲内で隣近所の世話をしていたというのが実態であったと認識できる。加えて、そうした訪問奉仕活動は、かつて上村(1997: 247-257)が指摘したような純粋な博愛精神に基づいたものというよりはむしろ、訪問形態の仕事に従事していたKさんのライフスタイルが大きく影響していたと考えられる。一方、下線②から、家庭養護婦派遣事業の普及を考えた竹内が、教会仲間の婦人会会員たちによる日曜活動に注目し、彼女らの訪問奉仕活動をホームヘルプ事業の後押しのような形で捉えていたと考えられることが明らかになってきた。このような聞き取り調査を皮切りに、以後、筆者はKさん宅に延べ13回訪れ、私的事項をうかがったり、逆に筆者の研究活動を叱咤激励していただいたりもした。また、その都度、懇切丁寧な対応をして下さり、ご理解を示していただき、こうした経験からも、Kさんの人柄を筆者なりに感じ取ることができた。因みに、筆者が行ったKさんへの聞き取り調査日程を記すと以下ようになる。2012(平成24)年3月25日現在もご健在のKさん(92歳)は、デイサービスに通いながらも静かな日々を送られている。

2007年8月16日(Kさん宅)、同年同月17日(Kさん宅)、2008年6月11日(Kさん宅)、同年12月15日(さがみ典礼上田法事センター、竹内吉正氏の通夜、娘さんに同伴)、同日(Kさん宅)、2009年1月3日(Kさん宅)、同年2月25日(Kさん宅)、同年6月12日(Kさん宅)、同年8月3日(Kさん宅、金子吞風について)、同年10月3日(Kさん宅、英国調査の結果報告)、同年12月19日(Kさん宅、金子吞風について)、2010年3月14日(Kさん宅、論文上梓)、2012年3月25日(Kさん宅)。

## (2) 竹内吉正論文(1974)の矛盾点

さて、ここまでホームヘルパーのモデルとされたKさんの居住地、実父、ボランティア活動、教



会活動、仕事内容などについて、先行研究では言及されてこなかった諸点を浮き彫りにしてきた。これらはホームヘルプ事業の起源を語るうえで、不可欠な新知見と考えられるが、その一方、既述の通り、竹内論文の記述内容と幾つかの点で食い違いがみられたことも事実であった。1974（昭和49）年に竹内が受賞した「老人福祉文献賞」（入選）は、全国社会福祉協議会老人福祉文献賞係において厳正に審査されたものであり（図4参照）、公正な審議を経て付与されたものであるが、にもかかわらず、竹内の記述内容に明らかな誤謬が残されていたのは何故なのだろうか。竹内論文と竹内及びKさんの証言とを擦り合わせながら、筆者なりの疑問点を指摘すると次のようになる。

- a) 竹内は「金子」という名字を使わず、何故Kさんと表記したのか、
- b) 何故、Kさんの実家・住まいを袋町ではなく木町と間違えたのか、
- c) 教会仲間としてKさんと何度も会っている竹内が、何故、Kさんとはついに面会を果たし得ず、Kさんのことを「青い鳥のような存在」<sup>13)</sup>と論述したのか、
- d) その後のKさんの消息として、広島移住説はどこから出てきたのか<sup>14)</sup>（根拠不明）

こうした諸点について、筆者は執筆当時の状況を竹内に尋ねたところ、「あのね、この論文を書くときにね。こんなに細かく調べていないから。あなたのほうが正しいよ。」（2007年8月17日、筆者による竹内氏への聞き取り調査の結果より）という回答が得られた。すなわち、竹内論文の内容自体の検証という新たな課題が浮上したことになる。なかでも、筆者がもっとも注目した点は、果たしてこのKさんの取り組みが家庭養護婦派遣事業のモデルになり得ていたか否かという点であった。この点は、上田市のホームヘルプ事業発祥説の根幹を揺るがしかねない重要論点であるため、慎重に検討する必要がある。そこで、表2を作成し、竹内論文とKさん証言とを時系列に並べて比較検討した。その結果、1956（昭和31）年当時、東京都大田区大森に居住していたKさん家族5人が、夫の病死（1958年11月）の後、実家を頼って帰郷したのは1959（昭和34）年4月のことであり、この時、同市ではすでに家庭養護婦派遣事業の始動（1956年4月）から3年間経過していることが明らかになった。ここに3年間の時間的ズレが看取でき、このことからKさんモデル説の成立は困難となろう。すなわち、Kさんがモデルになり得るには、Kさんの帰郷が少なくとも、同市のホームヘルプ事業始動期である1956年4月以前でなければならないにもかかわらず、その3年後に帰郷していたという事実が判明したことから、定説を覆す事実が浮上したことになる。ここからKさんは家庭養護婦派遣事業のモデルにはなっていなかったという新事実が明らかになった。これが本稿を通じて提唱しようとする新説である。

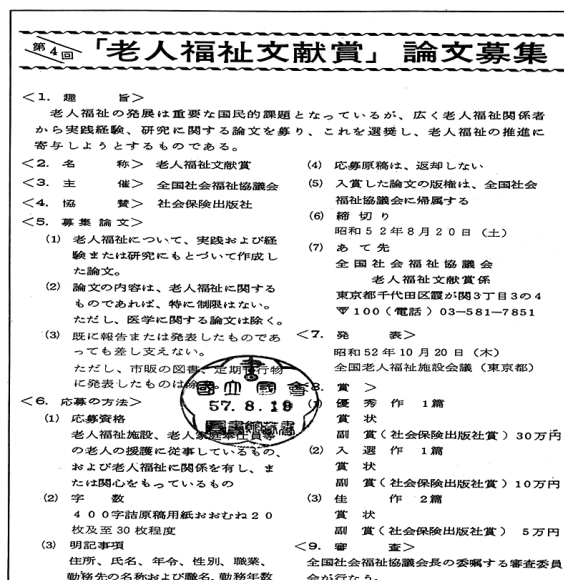


図4 「老人福祉文献賞」論文募集記事  
【出典】『第4回『老人福祉文献賞』論文募集』『老人福祉』第51号、1977年。

表 2 竹内吉正論文（1974）の矛盾点

○竹内吉正「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望」『老人福祉』第 46 号, 1974 年, 58-79 頁。		○筆者による聞き取り調査での K さん・娘さん（長女）の証言 (2007 年 8 月 16 日・17 日, 於上田市 K さん宅)	
昭和 27・28 年頃	上田市木町在住のクリスチャン未亡人 K さんが奉仕活動始める（約 3 年間）。	昭和 27・28 年頃	東京都大田区大森において, K さんは家族 5 人で暮らしていた。
昭和 29 年 12 月	上田市社会福祉協議会が発足。	昭和 29 年頃	(同 上)
昭和 30 年秋	上田市中央地区民生委員会月例会で, K さんの奉仕活動が報告され, 表彰することに。	昭和 30 年頃	(同 上)
昭和 30 年 9 月	上田市社協が在宅家庭へのボランティア活動「家庭養護ボランティア事業」を開始。	昭和 30 年頃	(同 上)
昭和 31 年 10 月	家庭養護婦派遣事業開始（長野県上田市社協）	昭和 31 年頃	(同 上)
昭和 33 年 4 月	家庭養護婦派遣事業運営研究会開催（上田市）	昭和 33 年 11 月	K さんの夫が癌で病死。K さん未亡人となる。
昭和 34 年 4 月	_____	昭和 34 年 4 月	クリスチャン未亡人 K さん, 子ども 3 人を連れて, 上田市袋町の鮎屋「武蔵野」に帰郷。
昭和 35 年 4 月	_____	昭和 35 年 4 月	K さんら家族 4 人は, 現住所である上田市 T に移住。やがて K さんは上田聖ミカエル及諸天使教会で, 竹内吉正の呼びかけにより, 教会活動の一環として, 訪問奉仕に協力する。
昭和 38 年 7 月	老人福祉法制定に伴い, 家庭養護婦派遣事業は, 老人家庭奉仕員制度に移行。	昭和 38 年 7 月	(同 上)

【出典】筆者作成による。なお, 同表は, 中嶋 洋著『日本における在宅介護福祉職形成史研究』（国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科 2011 年度博士学位論文, 医療福祉学博士, 保博乙第 33 号）2012 年, 53 頁に掲載されている。

## 5 研究結果Ⅲ——史的根拠に基づいた K さん特定の裏づけ

上記見解は, 戦後日本のホームヘルプ事業史に関する研究史上, 大きな修正を要するに値する内容と考えられる。このことはさらに多角的に追究する必要があるが, 事実に基づいた論述は歴史研究の鉄則であり, 基本に忠実でなければならない。但し, その一方, 筆者の聞き取り調査により辿り着いた上田市在住の民間女性 Y さん（本稿では便宜上 K さん）が, 竹内が論及した K さんと同一人物であることの根拠も求められよう。そこで, 筆者はこの点を解明すべく, K さんの実父とされる金子呑風と, K さんの家族構成という 2 つの側面からアプローチを試みた。以下, 第一次資料などを基に明らかになったことを指摘する。

### （1）K さんの実父が民生委員協議会代表という視点から

まず, K さんの実父とされる金子呑風に関し, 筆者は上田市立図書館に所蔵されている 2 つの書籍から詳細な記述を見つけ出した。ここでは, K さんの実父であるということに加え, 竹内が証言したように, 金子の民生委員としての功績を明らかにすべく, それらを繙いた。各々から明らかになったことは次の通りである。

1) 『長野県人名鑑』(1974 年) の記述から

金子呑風(本名 喜一郎)川柳作家 【生】明治 28 年 9 月 6 日生(父故国太郎, 母故為子長男)【家族】長女 ○○ 二女 Y(大正 9 年 4 月 8 日生 上田市立高女卒 I 氏に嫁す) 長男 ○○ 同妻 ○○ 三男 ○○ 【歴】大正 6 年家業を継業 昭和 35 年(有)武蔵野本店取締役社長に就任 33 年上田市文化功労者として表彰を受く 47 年長野県老人クラブより表彰される 48 年上田市民生委員中央地区代表を病気のため辞し, 袋町区委員となる その間 23 年より 29 年まで自治会長を務む 【公】川柳人協会会員 【趣味】川柳研究, 謡曲, 旅……(信濃毎日新聞社開発局出版部編 1974: 136。下線筆者。この箇所が K さんに該当すると考える。)

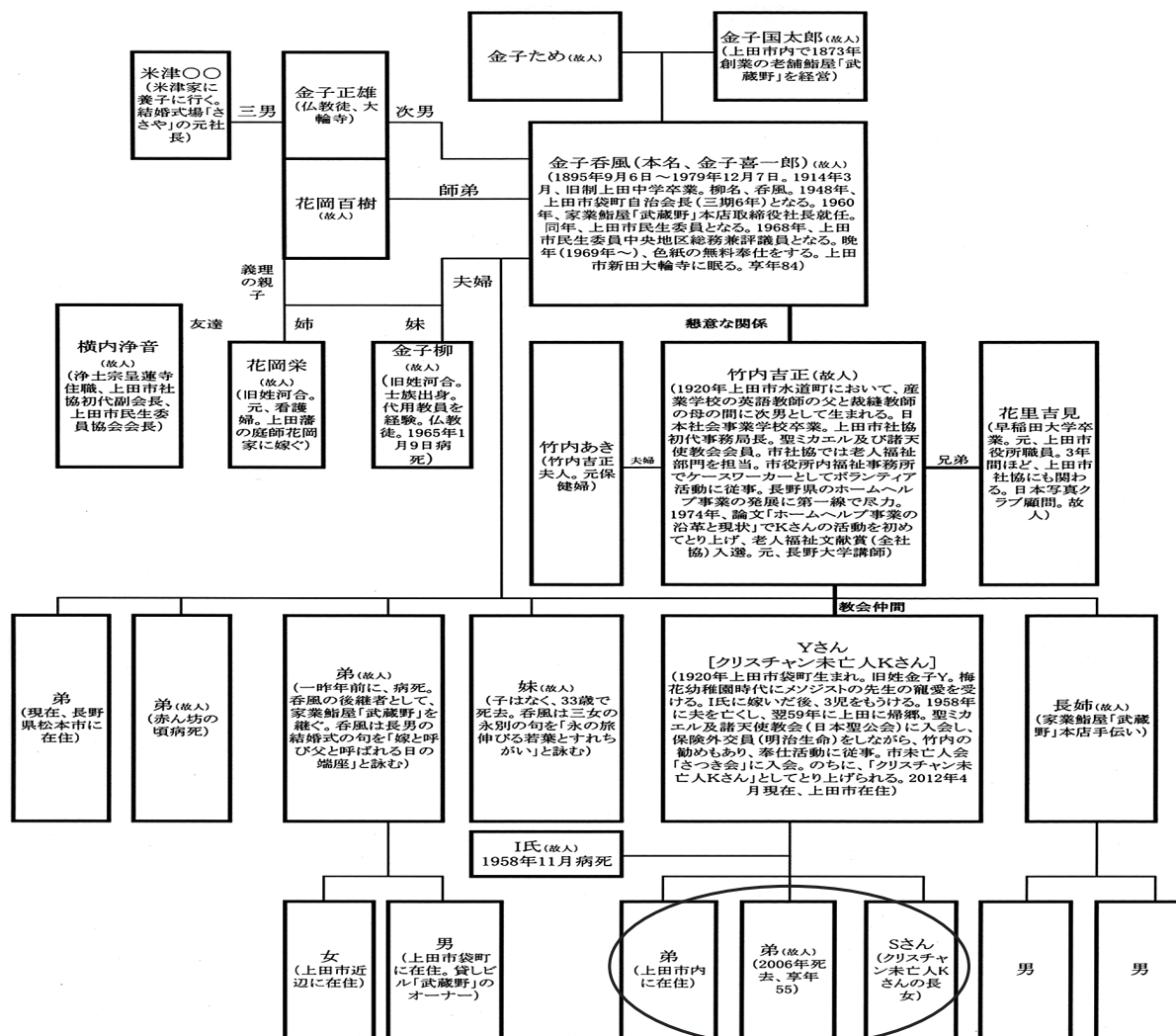
2) 『川柳総合大事典 第 1 巻〈人物編〉』(2007 年) の記述から

呑風(どんふう) 1895-1979 【新川柳】本名・金子喜一郎。別号・籠妻居, 有魚亭。明治二十八年九月六日, 上田市生まれ。料理飲食店経営。大正三年秋, 花岡百樹の川柳指導を仰ぎ, のち二十一歳のとき川柳会を創立, 瓢会と称し同志を集め, その先頭に立つ。中京の「鯪鯢」をはじめ全国柳壇に投稿。昭和六年百樹門下の塩入不及, 桜井由紀丸, 林草一と六文銭川柳社を興して「六文銭」を創刊。こんにちの川柳六文銭上田吟社の基礎を築いた。県下同好の推進に力を尽し, NHK ローカル放送, 『信濃毎日新聞』夕刊柳壇選者として活躍した。昭和五十六年, 句集『籠妻居』を刊行。上田公園内に句碑〈城一つ伸びゆく街の灯を見つめ〉建立。上田市文化功労賞受賞。昭和五十四年十二月七日没。享年八十四。再婚を拒む遠くの子が一人(尾藤三柳監修 2007: 195。下線筆者。この箇所は, 東京在住当時の Kさんを金子が詠んだものと推察される。)

上記から, 金子呑風は武蔵野本店取締役社長を務める一方, 川柳歌人としても名高く, 上田市文化功労賞を受賞するなど文化人として, 同市内で名を馳せていたことが窺い知れる<sup>15)</sup>。また, 上田市民生委員中央地区代表や自治会長を務めるなど, 竹内の論述や証言と合致している点がある。さらに, 『長野県人名鑑』(1974: 136)に記載されている二女や『川柳総合大事典 第 1 巻〈人物編〉』(2007: 195)の川柳句「再婚を拒む遠くの子が一人」などは, Kさんのことを示唆していると考えられる<sup>16)</sup>。つまり, Kさんの実父という観点から捉えると, 竹内が述べた Kさんモデル説の対象となったのが, この Yさんであると認識できる。

(2) Kさんの家族構成(実子: 女・男・男)の視点から

他方, 未亡人となったクリスチャンの Kさんの家族構成という観点から検討すると, 以下のことがいえる(図 5 参照)。まず, 竹内(1974: 54)は, Kさんの子ども 3 人(長女 会社員, 長男 小 6, 次男 小 1)と記述しているが, 前述の Kさんモデル説の対象となった Yさんの家族構成をみると, 「女, 男, 男」と合致している(図 5 中の丸印参照)。但し, 年齢幅については多少誤差がみられ, Kさん及び娘さんの証言から「中 1, 小 5, 小 3(当時)」であったことが分かった<sup>17)</sup>。また, 金子家において, 「クリスチャンで未亡人」という条件に該当する人物は, Yさん以外には存在せず, この Yさんが Kさんモデル説のモデルであることが家族構成という観点からも立証されよう。



【出典】2007年8月16日～2012年3月25日までに延べ13回行った筆者によるKさん及び娘さんへの聞き取り調査の結果を基に、筆者作成。

竹内吉正氏は、上田市社会福祉協議会初代事務局長として、民間社会福祉問題への取り組みとして、「ホームヘルプ事業」の創設・展開に取り組んだが、そこで、竹内氏の果たした役割とは何か。荏原(2008: 9)は「この事(家庭養護婦派遣事業の創設)は上田市でなくてもどこでも起こりうる状況であったに違いない」というが、竹内氏の記述やKさんの証言に基づいた場合、キーパーソンである竹内氏という存在なくしてはこうした画期的な事業やその歴史研究上の進展は果たし得なかったのではないだろうかと考える。また、上村(1997: 247-257)、山田(2005: 194)らが言及したKさん広島移住説も根拠不明であり、竹内氏自身もクリスチャンであったことから<sup>18)</sup>、上田聖ミカエル及諸天使教会婦人会会員らとの交流や、県社協関係の幅広い人脈などの少なからぬ影響があったと考察する<sup>19)</sup>。母子家庭の親子への理解と支援という深い慈愛の念が竹内氏の内面に芽生えたからこそ、同市内でのホームヘルプ事業化が進展したと考え得る。他方、竹内氏が、約20年前の出来事を想起しながら執筆した論稿(1974: 58-79)の内容の信憑性には幾つかの限界があった。しかし、ホームヘルプの普及・



定着を志向し、自らの責任で上田市内での当時の実践を記した竹内氏の試みは、これまでそれ程注視されていなかった同地でのホームヘルプ実践や民間社会福祉事業に衆目を惹き付ける結果をもたらし、在宅福祉実践に特化した論を展開していた点に大きな意義があった<sup>20)</sup>。ここで、改めて、本稿で明らかになった点を整理すると以下の7点が指摘できる。

- ① ホームヘルパーのモデルとされた K さんとは、金子吞風の二女 Y さんのことであり、クリスチャン未亡人であること（子ども3人：女・男・男）、
- ② K さんモデル説の対象となった Y さんは、1959 年 4 月に上田市に帰郷していることから、K さんは 1956 年 4 月から始まった家庭養護婦派遣事業のモデルにはなり得なかったこと（3 年間の時間的ズレが明確になったこと）、
- ③ K さんモデル説の対象となった Y さんは、保険外交員の仕事をしており、セールス業務の空き時間を有効活用し、近隣家庭などでボランティア活動をしていたこと（こうした活動が民生委員たちの目にとまった可能性があること）、
- ④ 上田市民生委員中央地区協議会で表彰されたのは、K さんではなく、K さんの実父（金子吞風）であり、彼は同市民生委員中央地区代表を務め、川柳歌人として幾度も表彰されていること（上田市文化功労賞も受賞<sup>21)</sup>）、
- ⑤ K さんの実家は、木町ではなく袋町にあった鮎屋「武蔵野」（店主 金子吞風）であり、金子と竹内の両氏は懇意な間柄であったこと、
- ⑥ K さんと竹内氏は教会仲間（上田聖ミカエル及諸天使教会）で何度も会っていること、
- ⑦ 竹内氏は論文で K さんとイニシャル表記したり、広島移住説を唱えたりしているが、それらは確証がないまま（本人に確認をとらずに）、伝聞・推量などにより記述された部分があること。

## おわりに

上記 7 点は、筆者が 2006（平成 18）年から 2012（平成 24）年までの 6 年間余を費やして明らかにした事柄であり、戦後日本のホームヘルプ事業史上の新説を裏づけるものである。長野県上田市における家庭養護婦派遣事業の起源を語る際、この K さんのみならず、原崎秀司、竹内吉正、横内浄音、関澤欣三、金子吞風などの幾人かのキーパーソンの存在なくしては語れないといっても過言ではない。とりわけ、竹内氏や K さんの思想や生涯に関する詳細な研究は今後の継続的課題となるのだが、こうした地道な作業を通じ、人々の生き方の問題に関する自己責任を超えた連帯責任の認識と、豊かな社会を構築するための共生や社会福祉に関する知恵・理解を汲み取ることが求められよう。

今回の歴史研究を通じて、本稿では、先行研究における言及の甘さや矛盾点を指摘する結果に至ったが、そうした事実に対する表面的な理解や認識といった姿勢は慎まなければならない。仮に、K さんや竹内氏のように、歴史上の一瞬を捉えて生まれた、じっと耐えているだけのようにはみえた人々が、みえざる場所でしっかりと花を咲かせる準備をし、新しい時代のパイオニアとなるべく、幕開けに尽力していたことも忘れてはなるまい。本稿における K さんモデル説への否定は、竹内氏の文筆や K さんの実績、さらには上田市における福祉実践の先進性を減退させるものでは決してなく、ホームヘルプにおける先駆的な取り組みを史的根拠に基づき、正しく捉え直す必要性を主張するもので

あった。

本研究に対し、ご理解・ご協力下さった故 竹内吉正氏、K さん、娘さんをはじめ、多くの上田市民の方々に深謝する次第である。今後は、多様なテーマについての歴史研究上の記述の誤りや方法論上の限界を克服するために、さらに対象を拡大した調査・研究の可能性を探っていきたい。

## 注

- 1) 未亡人対策の問題は、1954（昭和 29）年当時の長野県議会でも幾度か検討されていることから、この問題が県域的な重要課題の一つであったことが窺える（長野県議会事務局『第百十四回長野県議会（定例会）会議録』第 11 号、1954 年、243-703 ページ）。
- 2) 「もはや戦後ではない」が流行した昭和 30 年代前半には、「人生 60 年の時代」と言われ始め、目前に迫った「人生 70 年の時代」に向けて、国民皆年金の制度が始動するなど、社会福祉分野の法制化の整備が進められた（福祉文化学会編『高齢者生活年表 1925-1993』日本エディタースクール出版部、1995 年、17-33 ページ）。
- 3) 上田市家庭養護婦派遣事業実施要項は、一．目的～十五．実施期間まで 15 項目の規程があり、とりわけ、「家庭養護婦」については、「心身ともに健全であって家事の処理に必要な知識と経験を有し適切にこれを援助できる者」とされた。
- 4) 竹内氏は、上田市社協初代副会長の横内浄音（浄土宗呈蓮寺住職）の勧めで、1953 年頃に同市社協初代事務局長に就任し、1961 年 4 月、長野県社会福祉協議会主事、同組織課長へと昇格、その後、上田聖ミカエル及諸天使教会 SW、宝池住吉寮及び慈光園長、小諸学舎理事長、長野大学非常勤講師（「地域福祉論」担当）などを歴任したように、上田市の社会福祉の基礎を築いた一人と言っても過言ではない人物として注目される。
- 5) この K さんに焦点をあてたこれまでの筆者の論稿としては、中嶋 洋「長野県上田市における家庭養護婦派遣事業（1956 年）の歴史的意義」『日本ボランティア学会誌 2006 年度版』2007 年、172-187 ページ。同「ボランティア活動の実践からホームヘルプ事業化への道すじ——長野県上田市における事例を中心に」『上智大学教育学論集』第 42 号、2008 年、83-98 ページ。同「戦後日本のホームヘルプ事業の起源——発祥地、長野県上田市木町の 1950 年代の状況を探る」『帝京平成大学紀要』第 19 巻、2008 年、55-66 ページなどがあげられるが、史的根拠に基づく十分な検証が課題となっていた。
- 6) 中嶋 洋「ホームヘルプ事業の黎明としての原崎秀司の欧米社会福祉視察研修（1953-1954）——問題関心の所在と視察行程の検証を中心に」『社会福祉学』第 52 巻第 3 号、2011 年、28-39 ページ。
- 7) 2007 年 8 月 15 日・17 日、筆者は竹内氏に対し聞き取り調査（各々約 70 分）を行ったが、倫理的配慮として、調査結果の引用許可を両日に竹内氏本人から得た。
- 8) 横内浄音や呈蓮寺の詳細については、横内浄音『呈蓮寺縁起と八十年のあゆみ』（年月日不詳、横内浄真氏蔵）を参照のこと。
- 9) 山田知子「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する研究」『大正大学研究紀要 人間学部・文学部』第 90 輯、2005 年、194 ページ。
- 10) 但し、この Y さん（K さんのこと）は、現在一般の上田市民として同市にお暮らしのため、とりわけ倫理的配慮を払わなければならない。調査結果の引用許可については、2009（平成 21）年 12 月 19 日に K さん及び娘さんから得たものの、本名の公表や私的事項の公開は拒まれた。よって、本稿では、すでに公的機関（上田市立図書館など）で公開されている資料以外については使用せず、あわせて、個人名を特定できる記述についてはイニシャル表記とすることにした。
- 11) なお、筆者は、金子の甥にあたる米津福祐氏に対し、2009（平成 21）年 12 月 18 日に結婚式場「ささや」で、2010（平成 22）年 3 月 14 日に塩田町公民館で聞き取り調査を実施し、金子吞風の詳細についてご教

授いただいた。

- 12) 中嶋 洋「ボランティア活動の実践からホームヘルプ事業化への道すじ——長野県上田市における事例を中心に」『上智大学教育学論集』第42号、2008年、83-98ページにおいて、すでに当該箇所の引用はしているが、要約版であったため、今回、なるべく全文に近い形で載せるように努めた。
- 13) 「筆者はこの記述にあたり、ホームヘルプの雛形となったKさんに面談しようと努力したが、遂に果たせなかった。ボランティア活動を追い求める私には、Kさんは『青い鳥』のような存在である。」と竹内氏は記述している（竹内吉正「ホームヘルプ制度の沿革と現状——長野県の場合を中心に」『住民福祉の復権とコミュニティ』1974年、74ページ）。
- 14) 広島移住説について、竹内氏は筆者の問いかけに、「私はよく分からない。」（2007年8月15日、筆者による竹内氏に対する聞き取り調査の結果より）と端的に答えている。こうしたことから、1974年時に作成された竹内論文のなかに部分的に不完全な箇所があったことが窺い知れよう。
- 15) 中嶋 洋「長野県上田市における民生委員活動の史的考察——制度史の捉え直しと金子吞風の実践を中心に」『帝京平成大学紀要』第21巻第2号、2010年、55-77ページに詳しい。
- 16) 金子が実子Kさんについて詠んだと思われる川柳は、「保険屋の名刺に近火くすぐられ」「信託の勤める根気ほめて捨て」「姉の眼にボーイフレンド危なそう」「婦人会会議のあとは踊るとし」などがあげられる（同上書、66ページ）。
- 17) 2007年8月16日、筆者によるKさん及び娘さんへの聞き取り調査の結果より。
- 18) 竹内氏が、上田聖ミカエル及諸天使教会（日本聖公会）で洗礼を受けたのは、1953（昭和28）年12月24日のことであり、氏が33歳の時であった。
- 19) 1961（昭和36）年4月に長野県社会福祉協議会組織課長に就任した竹内氏は、その後、県域的に人脈を拡げていったと推察される。このことも、長野県下におけるホームヘルプ事業の普及要因の一つになったと思われる。
- 20) その証左として、長野県ホームヘルパー協会『長野県ホームヘルパー協会20年のあゆみ』1991年、20ページや、長野県社会福祉協議会『長野県社会福祉協議会50年のあゆみ』2003年に、竹内氏の論述を引用した記述がみられる。
- 21) 一方、浄土宗呈蓮寺住職であり、上田市社会福祉協議会初代副会長及び同市中央地区民生委員協議会会長を務めた横内浄音も、『上田郷友會月報』第685号の「會員の動静」欄で、「方面委員の功労者として長野県知事より表彰せらる」と記され、その活躍ぶりが注目される（上田郷友會『上田郷友會月報』第685号、1944年、13-14ページ）。

## 文 献

- 明山和夫・野川照夫「老人家庭奉仕員制度——その沿革と現状」『ジュリスト』第543号、有斐閣、1973年、101ページ。
- 池川 清「大阪市に家庭奉仕員が誕生するまで」『月刊福祉』第56巻第3号、全国社会福祉協議会、1973年、59ページ。
- 井上千津子・尾台安子・高垣節子・上之園佳子『介護福祉総論』第一法規、2005年。
- 上田郷友會『上田郷友會月報』第685号、1944年、13-14ページ（上田市立図書館蔵）。
- 上田市誌編さん委員会編『上田市誌 人物編 明日をひらいた上田の人びと』上田市・上田市誌刊行会、2003年。
- 上田市社会福祉協議会『住民と共に歩んだ50年』2006年。
- 『上田市住宅案内図（付 丸子・真田）』日地刊行会、1960年（上田市立図書館蔵）。
- 『上田市住宅地図 昭和37年度』1962年（上田市立図書館蔵）。
- 『上田市住宅案内図（併・小県郡・坂城町） 昭和39年度』日興出版、1964年（上田市立図書館蔵）。
- 『NTT 東日本 ハローページ 長野県長野版』2011年。

荏原順子「ホームヘルプサービス事業揺籃期の研究——長野県上田市における『家庭訪問ボランティア支援事業』の背景」『純心福祉文化研究』第6号, 2008年, 1-11ページ。

遠藤興一「方面委員制度史論序説」『明治学院論叢』第219号, 1974年, 35-70ページ。

介護福祉学研究会監修『介護福祉学』中央法規, 2002年。

上村富江「上田市ホームヘルプサービスを担った女性たち」『社会福祉のなかのジェンダー——福祉の現場のフェミニスト実践を求めて』ミネルヴァ書房, 1997年, 247-257ページ。

信濃毎日新聞社開発局出版部編『長野県人名鑑』信濃毎日新聞社, 1974年(上田市立図書館蔵)。

竹内吉正「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望」『老人福祉』第46号, 1974年, 58-79ページ(老人福祉文献賞受賞作品, 於 全国老人福祉事業会議)。

竹内吉正「ホームヘルプ制度の沿革と現状——長野県の場合を中心に」鉄道弘済会編『住民福祉の復権とコミュニティ』1974年, 54-75ページ。

竹内吉正「施設での老化へのとりくみ②——支え合い, 仕えることの喜びをとおして豊かな老後を」『手をつなぐ親たち』No.320, 1982年, 14-19ページ。

中嶋 洋「長野県上田市における家庭養護婦派遣事業(1956年)の歴史的意義」『日本ボランティア学会誌 2006年度版』2007年, 172-187ページ。

中嶋 洋「ボランティア活動の実践からホームヘルプ事業化への道すじ——長野県上田市における事例を中心にして」『上智大学教育学論集』第42号, 2008年, 83-98ページ。

中嶋 洋「わが国の介護福祉士制度の起源——長野県における先駆的福祉実践に関する歴史的資料の分析」『生涯学習フォーラム』第10巻第1・2合併号, 2008年, 111-132ページ(上智大学図書館蔵)。

中嶋 洋「戦後日本のホームヘルプ事業の起源——発祥地, 長野県上田市木町の1950年代の状況を探る」『帝京平成大学紀要』第19巻, 2008年, 55-66ページ。

中嶋 洋「長野県上田市における民生委員活動の史的考察——制度史の捉え直しと金子吞風の実践を中心に」『帝京平成大学紀要』第21巻第2号, 2010年, 55-77ページ。

中嶋 洋「ホームヘルプ事業の黎明としての原崎秀司の欧米社会福祉視察研修(1953-1954)——問題関心の所在と視察行程の検証を中心に」『社会福祉学』第52巻第3号, 2011年, 28-39ページ。

中嶋 洋著『日本における在宅介護福祉職形成史研究』(国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科 2011年度博士學位論文, 医療福祉学博士, 保博乙第33号) 2012年。

長野県社会福祉協議会『長野県社会福祉協議会 50年のあゆみ』2003年。

長野県ホームヘルパー協会『長野県ホームヘルパー協会 20年のあゆみ』1991年。

野川照夫「家庭奉仕員制度について(覚書)——老人家庭奉仕員制度を中心に」『人間関係論集』創刊号, 1984年, 109-119ページ。

原田正二「老人家庭奉仕員制度の問題」『明治学院論叢』第218号, 1974年, 105-126ページ。

尾藤三柳監修『川柳総合大事典 第1巻〈人物編〉』雄山閣, 2007年。

保健福祉地区組織育成中央協議会『(活動記録) 上田市の保健福祉活動』1959年, 17ページ(日本社会事業大学図書館蔵)

森 幹郎「ホームヘルプサービス——歴史・現状・展望」『季刊 社会保障研究』第8巻第2号, 1972年, 31-39ページ。

森 幹郎著『ホームヘルパー』日本生命済生会社会事業局, 1974年。

山崎鮮紅編『川柳「六文銭」』六文銭上田吟社, 第1巻第1号, 1961年, 4ページ(上田市立図書館蔵)。

山田知子「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する研究」『大正大學研究紀要 人間學部・文學部』第90輯, 2005年, 178-198ページ。

(なかしま ひろし 初等教育学科)